

## 連載・海外便り（その5）

### -カンボジアにおける青果物流通の現状と課題-

食品流通アドバイザー

田中技術士事務所 代表 田中 好雄

カンボジアの首都プノンペンへは成田からバンコクを経由とするルートと、韓国の仁川経由のルートがある。今回はタイ国際航空を利用しバンコックまで6時間、乗継ぎ後約70分でプノンペン国際空港へ到着した。夜の7時というのに30度の気温、空港からホテルまでの道路にはバイクで家路に急ぐ家族の姿が多く見られた。

カンボジア政府にとって農業は国家開発戦略の重点分野の一つである。多くの農民は自給的な稲作を行っており、余剰農産物を販売できる規模の農家は全体の3割程度に過ぎないとみられている。近隣の国々と比較しても灌漑、肥料、農機具が未開発、もしくは十分利用されておらず、また流通体制が未整備で、加工施設、貯蔵施設も不足している。そのため安い価格で農産物が海外へ流出し、商品価値の高い加工製品が輸入されるという悪循環が続いている。

カンボジアで栽培されている野菜には多くの種類がある。キャベツ、空心菜、レタス、青梗菜、中国ケール、辛子菜、白菜などといった葉菜類、ナガササゲ、サヤインゲン、フジマメなどといった豆科野菜、キュウリ、シロウリ、スイカ、カボチャなどの果菜類、サツマイモのような塊茎根類である。キャベツ、ショウガ、バレイショ、ニンジン、トマト、白菜などはその多くを輸入に依存している。カンボジアーベトナム間の物資往来が格段にスムーズになってきており、ベトナム産野菜の輸入が急増してきている。

カンボジアでは農産物が生産者、仲買人といった個人の販売によってしか流通しておらず、卸売りが存在しないこと、そして企業への発展がないことにより資金不足が発生している。カンボジア政府及び農林水産省は市場開拓やアグリビジネスの成長に力を入れているといえるが、実施資金に関してはドナー頼みなため、なかなか計画通り実施されていないというのが現状である。

今回、生産拠点として選ばれたスバイリエン州は、プノンペンから東におよそ120kmの位置にあり、7郡に約53万人が居住し、人口の約9割が農漁業に従事している。スバイリエン地方農業局は農林水産省との強いパイプを持つ局長のリーダーシップのもと、様々な農業を通じた生活向上を目指した活動を行っている。JICAプロジェクト(フェーズ1)によりスバイリエン州スバイチュルム郡において女性組合の組織力を生かした生産者グループを作り、グループを通してメンバーが野菜を市場に出荷するというシステムを作り上げた。スバイリエン州農産物組合に生産・販売の強化、運営・経営の安定化を目指して支援を実施し、首都圏向けの野菜の出荷量、売上総利益ともに30%前後の伸びを見せるようになった。地元の安全な野菜を主に仕入れようとしているAEONとはサプライヤーとして契約を結び、2014年6月の開店以降は一日おきの出荷が予定されており、包装された青果物が店

頭を飾った。



AEON プノンペン 1 号店青果物売場